

【研究者】

服部龍二

【所属機関および職名】(助成決定時)

中央大学総合政策学部 助教授

【研究題目】

幣原喜重郎と日米関係

【研究の目的】

申請者は十年来、戦間期を中心とする東アジア国際政治を研究してきた。その成果は、拙著『東アジア国際環境の変動と日本外交 1918-1931』(有斐閣、2001年)、拙編『満州事変と重光駐華公使報告書 外務省記録「支那ノ対外政策関係雑纂『革命外交』」に寄せて』(日本図書センター、2002年)、拙著『国際政治史の道標 実践的入門』(中央大学出版部、2004年)に一応結実したものの、その過程で幣原喜重郎や重光葵といった外交官を個人レベルで研究する必要性を痛感していた。

とりわけ幣原喜重郎は、小村寿太郎や吉田茂などと並び立つような代表的外政家であり、占領期には首相にまで登りつめている。このような幣原に申請者は研究の意義を見出すようになった。今回の研究では、従来の幣原研究を一層深化させることで、20世紀の日米関係を再検証してみたい。

【研究の内容・方法】

幣原の活躍した期間は、明治より占領期に及ぶ。そのすべてを短期間で扱うことは、不可能である。そのため、助成期間内における研究としては、明治大正期に集中することとした。

まず、幣原の思想形成である。特に重要なのが、門戸開放主義への理解であろう。韓国併合も自然な成り行きとみなしている。また、乃木希典に傾倒し皇室を崇拝するという日本人のメンタリティは、幣原にも深く根を下ろしていた。

次に、幣原の外交的手法である。釜山領事までの幣原は、武断外交に違和感を示さない。それどころか、率先して日露開戦を推進した側面すらある。だが、デニソンとの出会いが転機となる。これ以降の幣原は、条約改正委員となったこともあり、国際法に熟知していく。外交的手法という意味では、広報の位置づけも重要になってくる。

さらに、幣原の人的関係である。周知のように、幣原は加藤高明と義兄弟であった。他にも幣原は、小村寿太郎や珍田捨巳、石井菊次郎、原敬などとも関係が深い。本研究では特に、小村寿太郎との関係に注目した。

最後に、当該期の諸外国が幣原ないしは日本との関係をどのようにみていたのかという

論点がある。個別の懸案交渉はもちろん重要だが、外交官の役割はそれだけではない。人脈や信頼関係の形成も、評価の基準となる。

【結論・考察】

幣原が理想としたのは、イギリス外交であった。特に、ブライスやグレーの影響は大きい。だからといって、幣原は必ずしも親英主義者ではない。そのことは、日英同盟廃棄を率先したことに集約される。

一方、駐米経験の長い幣原だが、ブライスやグレーに匹敵する人物をアメリカに見いだすことはなかった。とはいえ、幣原の方策自体は、アメリカ寄りのことが多かった。心情としては親英的だが、現実の行動はむしろ親米的といえる。外交のあるべき姿と日本の国益は別物なのであった。

外交的手法としては、幣原は、信頼関係の確立を第一義として、いわば正直な外交を心掛けた。そのことは、駐米大使期の日英同盟廃棄や広報に表れていく。